

新聞を活用した「表現探究」による学習の基盤となる資質・能力の育成

奈良県立香芝高等学校表現探究コース

1. 表現探究コースの概要

表現探究コースは言葉による表現を基本とし、プレゼンテーションや創作活動、探究的な学習を通して、言語能力や情報活用能力、コミュニケーション能力を身に付けた創造性豊かな人材の育成を目的としたコースである。

また、新設時からNIE実践指定校となっており、日々新聞が届けられ、新聞を活用した学びを実践している。

2. 「つかう」学びと「つくる」学び

新聞を活用した学びとして、「つかう」、「つくる」の2つの視点から学びを考察する。

2.1 「つかう」学び

阪神淡路大震災が発生した当時の新聞と現在の新聞を読み比べ、記事の大きさと内容を比較した。当時の新聞は複数の新聞社で大きく取り上げられていたが、現在の新聞は一社の新聞社のみが取り上げており記事が小さくなっていった。一方で当時の新聞を比較すると、被災者の数を示したり火災蔓延を伝えたりなど、異なる視点による見出しとなっていることが分かった。

また授業だけでなく、日々の日直活動としてその日の新聞記事から気になった記事を切り抜き、自分の感想を書く活動を行った。

2.2 「つくる」学び

はじめに、インタビューする内容を相手の取材先の情報をもとに検討した。次に実際にインタビューを行うが、事前に友人や教頭先生などにインタビューする中で、一問一答の会話ではなく、追質問を考え相手の情報をより深く知ることが重要であると学んだ。インタビュー後は、その内容をもとに新聞記事を作成した。作成した記事は、先生方の添削の後、グループで相互評価を行った。



これらの活動について、取材先を変えて繰り返し行うが、これは文部科学省の探究学習の流れで

ある「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」に合致している。

3. 学習内容の成果

新聞を活用した授業を行うことで、学習の基盤となる言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の涵養だけでなく語彙力が豊富になり、話す力や聞く力の向上につながったと考えられる。さらに異なる新聞社の記事の比較を行うことで、色々な視点から物事をとらえる力が身に付いた。

また新聞を活用した実践として、1期生の希望者と2期生全員が、ニュース検定3級に挑戦し、1期生の受験者の合格率が全国平均を上回った。その後も挑戦を続けた生徒の中には、準2級を取得した生徒が3名いた。

新聞を活用した学びやニュース検定の学習を通してメディアリテラシーの向上も見られたと考えられる。情報活用能力の意識調査でも、「情報の客観性について考えながら情報をいろんな角度から検討することができる」と肯定的に答えた生徒が、入学時比で約1.7倍増えた。

4. 今後の展望

新たな授業の提案として、新聞と理科や数学を掛け合わせた授業を挙げる。1つは、新聞と理科を組み合わせて、過去の震災の記事を題材にし、地学の視点から問題解決について話し合う授業である。また、新聞と数学を組み合わせて、新聞記事から感染症の感染者数の推移を調べ、グラフや表にまとめる授業などが挙げられる。これらの授業を通して、教科の枠を超えて知見が広がり、文章から情報を読み取る力も養われると考える。

参考文献 奈良県立香芝高等学校表現探究コース
<http://www.e-net.nara.jp/hs/kashiba/index.cfm/1,0,69,html>

学校新聞の有用性とその在り方に関する研究

—高校生が自分ごととして「平和」を考えるには—

岡山県立岡山南高等学校新聞部

1. はじめに

岡山南高新聞部は、学校新聞「岡山南高新聞」を年間3回程度発行している。学校行事の様子や生徒の活躍等を報道するだけでなく、これまで「SNSが観光にもたらす効果」「地域商店街の抱える課題とこれから」「校内外から校則を見直す」など、経済や教育など読者である在校生に新たな問題提起を行う紙面づくりを心掛けてきた。

現在、ロシアによるウクライナ侵攻は収束する気配もなく、世界規模の問題となっている。この事実を見過ごすわけにはいかないと、読者である全校生徒にこのことを「自分ごと」として捉えてもらうことを目的に紙面作りを行った。今回の研究では、学校新聞が読者である高校生と制作者である新聞部員の意識の変容を調査し、メディアとしての学校新聞の有用性とその在り方を考察する。

2. 生徒の実態

在校生を対象に、ウクライナ侵攻に関する関心度調査を行った結果、「ウクライナ侵攻に関心がある」と回答した生徒は8割だった。「ウクライナに対してできること」は、6割以上の生徒が「知ること」と答えたが、情報収集はたまたま流れてきたテレビやSNSでしか行っておらず、ウクライナの大統領名や首都名など、基礎的な知識も乏しい生徒もいた。

3. 新聞制作とそれによる生徒の変容

岡山南高は、商業学科・家庭学科をもつ専門高校である。そのため、ウクライナ侵攻が世界経済、地域経済に与えた影響に焦点を当てて、学校新聞「岡山南高新聞」で特集を組むことにした。ポーランドでウクライナ避難者への医療支援を行っている団体の職員、世界経済の研究者、地元スーパーや小売店の店主などを取材した。また、戦争に関する歴史を知ること重要だと考え、第二次世界大戦中の岡山空襲についても空襲展示室の学芸員に当時の様子を聞くなどして、紙面にまとめた。

完成した学校新聞は全校生徒に配付した。その後にアンケート調査を実施し、読後の変化を分析した。アンケート対象者のうち、26%が学校新聞を「読んだ」と答えた。読後の変容は「読んだ」生徒のうち32%の生徒に起きており、25%が「学校新聞がきっかけ」と答えた。インターネットでの情報収集に留まった生徒がほとんどだったものの、自ら調べた生徒が増えたことが分かった。

一方、新聞部員全員が様々な制作のプロセスで「変容した」とした。その中でも、「取材活動」が大きな変容をもたらしていた。「一つの事象もいろいろな目線で分析する必要があることを知った」「自分たち高校生が戦争の歴史を伝えていかなければならないと、自分のこととして考えるようになった」「自分たちで判断し、行動できる人になることが大切であると思う」などと答えている。現在、新聞部員には岡山空襲体験者の声を収集したいという思いが生まれている。高校生を「自分ごと」へと駆り立てるには、体験的な場を設けた探究的な活動を行うことが最も有用であることが分かった。

4. まとめ

新聞部は、これまでも読み応えのある紙面づくりを心掛けてきた。しかし、必ずしも多くの生徒に読まれているとは言えない。高校生は忙しい。しかも、毎日大量のチラシや広報誌が配付される。そうした中で意識や行動の変容まで起こすには、今回以上の内容が求められることが分かった。一方、制作側の新聞部員は大きな変容が生じていた。「自分ごとにするとはどういうことか」を追究し続けた結果である。このことは、新聞部員と同様の思考のプロセスを経験すれば、読者も社会的な課題を「自分ごと」にすることができることを現している。今後は、その観点で編集した新聞制作を行っていきたい。

課題解決における新聞づくりの役割 —学校新聞と地域新聞を事例として—

名城大学附属高等学校

これまで、校内の課題解決を目的に「名城タイムス」という学校新聞を作成してきました。私たちがテーマとして取り上げた課題は、校則の意義と必要性についてです。現在の校則に対する疑問を解消すべく先生方へのインタビューを行った結果、現在の校則に意義を感じていないとの声が多数ありました。一方で、校則の意味を明らかにした意見も見られました。これらの結果から、多くの人から存在意義に疑問を持たれている校則の必要性について主張してきました。反対にそれらの校則について挙げられた明確な意味も他の生徒と共有してきました。こうした過程を新聞にまとめることを通して、世論を形成するという新聞の役割を学ぶことができました。

次の段階として、一連の新聞づくり、プレ会での発表を終えた現時点での改善すべき4点について考えました。1つ目は、新聞づくりの中で得られた気づきを伝えるということです。実際に、新聞は様々な視点からの意見や自分たちの主張を載せることで紙面上での討論を可能にすること、さらには、その可能性を秘めた新聞が問題解決の橋渡しの役割を担うことを実感しました。2つ目に、読み手への意識の欠如です。プレ会后、私たちが作成した新聞、他のグループが作成した新聞を公開し、批評しました。読み手の視点でいくつかの新聞を見ることができ、更なる高みを目指せると思いました。3つ目は、「人権」からの視点です。校則と人権の関係を考えたところ、意味のある校則は生徒の人権を守る役割を果たすが、意味を失った校則は、多様性を壊し、人権を奪うことにつながると思いました。4つ目は、今後の活動である地域新聞作成の意義です。学校新聞で新聞の役割の重要性を感じることができたからこそ、地域の課題へと視野を拡大していきたいと思えます。それに加え、新聞は他の手段と比較すると、周りの環境に左右されずに課題を伝えられるという利点があると思えます。

これらの活動、ブラッシュアップを踏まえ、地域の課題解決へと視点を広げていくことが今後の目的です。地域の課題を見つけ、解決策を考え、理想の街を創る一步を踏み出していきたいです。その手段として、世論を形成する力を持ち、問題解決への橋渡しの役割までも担う新聞の効果を十分に発揮させられる地域新聞を作成していきたいです。この活動を通して、地域の課題解決へと歩みを進めていきたいです。

これからの学校制服の行く先は？

－新聞報道から探る私たちの制服の未来予想図の一考察－

－関修紅高等学校 NIE 発表グループ

1. 「現在の学校制服の生い立ち立ち位置は？」

- ・学校制服について、誕生(制定)から現在までの歴史的な変遷をたどり、それぞれの時代に社会から求められてきた役割や問題点を明確にする。
- ・ジェンダー論や制服の多様化・自由化など、現在様々な角度から見直しや新たな進展を求められている学校制服の現状について、全国紙と地方紙（紙媒体・ウェブ版）の双方から情報を収集して、国内共通のトピックスと地域ごとの話題をそれぞれピックアップすることで、学校制服の転換点となるポイントを絞り込み、これから先の展望を探る。

2. 「現在の学校制服の立ち位置は？」

- ・記事（話題）を類型化（タイプ別に分類）し、それらの話題は「どの視点からの要請であるのか、誰から見た誰のための制服でありたい（あるべき）か」についての分析や考察を加え、求められている制服像に迫る。

ここでの視点は、A 当事者としての生徒 B 購入者としての保護者 C 第三者としての大衆
a 当事者としての生徒 b 指導する側の学校・教師 c 地域・進路先

と定めて、それぞれの考えや思惑、実感などの意見を無記名任意のアンケート（選択式・記述式）を実施して、新聞紙上で報じられている学校制服を取り巻く社会の流れと現場サイドでの共通認識や差異の有無を浮かび上がらせる。

3. 「制服は誰のために？ 学校制服の将来像」

実際、日々の学校生活に制服を着用している私たち「生徒」の生の声（認識）と1・2で明らかにしてきた社会的な要請を照らし合わせ、2で挙げた視点すべてから認められる学校制服の将来像について、一定の方向性を見出していく。

※アンケートに回答してくれる方々に集計結果を公表し、その結果を見ての感想をインタビュー形式で集約する。最終的には本大会での発表について、校内紙・地域紙で公表する。寄せられた反響を加味したうえで、次年度以降の探究テーマとして継続実施の有無を総合的に判断する。

ICT を活用した NIE 探究学習の実践

－ ICT 活用による情報の取捨選択に対する意識の検証－

京都先端科学大学附属高等学校

1 問題意識

クラウド型新聞編集アプリ「ことまど」を使って新聞を制作する学習活動を通じて、ICT を活用することで適切に情報を集め、必要な情報にたどりつき、伝えたい情報を的確に表現できているか検証することにした。

2 研究のねらい

- ①書き手の価値判断を表す「見出し」に着目し、本文は同じでも 5W1H の取り入れ方を変えた「見出し」を作成し、どの要素を取り入れた「見出し」が読み手に伝わるのか検証する。
- ②ICT を取り入れることで、写真・本文は同じでも「見出し」を変えることで、読者の新聞に対する印象が変わるのか検証する。

3 研究の概要

- (1) 2022 年度の高校 2 年古典 B の授業で『枕草子』『徒然草』の夏の風景が描写されている箇所を読解した。同じ時期に実施された校外学習と京都市内のフィールドワークの際に、京都の夏を実感させる写真を撮影した。これらの学習を踏まえて『枕草子』が書かれた平安時代と現代、『徒然草』が書かれた鎌倉時代と現代とをそれぞれ比較し、夏という季節の感じ取り方の相違点についてまとめ、新聞のコラムとして令和における夏の訪れをテーマに新聞を作成した。完成した 26 作品を比較すると、「香りで感じる夏の趣」というように的確に伝えたい内容が盛り込まれている「見出し」がある一方、「夏といえば!？」のようにあまりにも抽象的すぎて伝わらない「見出し」もあった。
- (2) (1) の実践を踏まえ、新聞の「見出し」に着目することにした。次は、研修旅行で訪問する富士山に関連付けて『更級日記』を読解した。研修旅行で見聞したことと、古典作品に関連付けて、改めて新聞づくりを行った。そして、写真と本文は同じものにして、5W1H の取り入れ方を変えた「見出し」をつけた新聞を用意することにした。まず、富士山に研修旅行に行った生徒（高校 2 年）に読んでもらい、「見出し」が一番良いと思ったものに投票してもらった。次に、研修旅行に行っていない生徒（高 1）に同じ新聞を読んでもらい、「見出し」が一番ふさわしいと思ったものに投票してもらった。そして、古典作品を読み現地へ行くという経験の有無によって、写真・本文は全く同じでも、「見出し」の伝わりやすさに違いがあるのか検証を行った。
- (3) 5W1H の取り入れ方を変えた「見出し」とテキストマイニングによって検出されたワードクラウドと比較し、見出しに入れるべきキーワードについて考察した。

4 成果と展望

「見出し」のパターン作成（新聞作成アプリ「ことまど」）や検証に用いたテキストマイニングという ICT を活用した研究を通じて、新聞における「見出し」の意義とその効果を検証することができた。

被災者が得たい情報を記者が安全に得るためには何が必要か

関東学院六浦中学校・高等学校

【テーマ】私は、被災者が災害後に情報を正確に得ることができない問題を解決したい。ここでの災害後とは被災者が避難所に着き、一時的にでも安全が保証されたあとのことを指す。

【背景】まず、被災者が情報を得る手段に関する事例を挙げる。熊本地震(2016)の際に、インターネットによる情報収集は、Wi-Fiの通信状況が悪化したときに使えなくなったという問題があった。一方で北海道胆振東部地震(2019)では、生活情報をまとめた新聞が被災者たちに重宝された事例がある。ここから、インターネットが情報手段として不安定だとわかる。さらに「正確に」情報を得るという点では、記者が自ら取材した一次情報が掲載されている新聞がインターネットより適切であるといえるため、災害時の被災者への伝達手段として「新聞」に着目した。しかし新聞は、印刷施設が被災した場合の課題や、現地に記者が行くことができない場合の課題がある。前者は東日本大震災の際に解決策が見出されている。後者は未解決のため、新聞の課題について、記者の課題に着目する。記者の災害時の課題を2点挙げる。矢内(2021)によると、福島原発事故で原発の近くの記者たちが、近くにいるが故に情報を得られないという構造的制約の下に置かれていた。記者は事故の全体像の情報を必要としていたといえる。次に、茨城県東海村JCO臨界事故(1999)で、現地取材した記者が被ばくした事例がある。後者の「記者の被災」は、先の新聞の課題である記者の課題と重なる。被災者へ新聞を通して正確な情報を提供するには、記者の安全を確保した上での情報伝達を検討する必要がある。

【問い・仮説】この背景から「被災者が得たい情報を記者が安全に得るためには何が必要か」という問いをたてた。これを明らかにすると、緊迫した被災者へ正確な情報を提供する手助けができる。これに対して「情報収集手段の改善が必要である」という仮説をたてた。記者の安全を確保するためには現在使われている手段以外の方法が必要と考えたためである。

【調査方法と結果】

記者が被災する可能性のある過程(調査①)

2022年6月24日に、日本新聞博物館にて展示物による調査と、(財)日本新聞協会の博物館事業部主管の方にインタビュー調査を行った。ここでは、記者が被災する可能性のある過程を明らかにすることを目的として、主に新聞が作成される過程を調査した。その結果、新聞が作成される過程が、『1. 情報を得る、2. 記事を書く、3. 見出しをつける、4. 他の記事と合わせて新聞紙面をつくる』という流れであることがわかった。1の過程で記者が被災する可能性があるかと判断した。

記者が被災する可能性のある過程における情報収集手段(調査①)

次に「1. 情報を得る」過程において、現在とられている方法を明らかにした。結果、沖縄の首里城の事件では、ドローンが遠くから現地の映像や写真を撮るという使われ方がされていることがわかった。またヘリコプターも使われている事例があるが、高度や時間帯の制約があることがわかった。

記者が情報を得る過程で、被災者から求められている情報(調査②)

最後に、「1. 情報を得る」過程において、被災者から記者に求められている情報は何かを明らかにするために文献調査を行った。結果、被災者が求める情報は、スーパーやガソリンスタンドの開店時間など生活する上で必要な情報と、生存者の所在の情報であることがわかった。

【考察】調査結果①から、ドローンやヘリコプターは、写真を撮ることのみの使われ方をしているが、情報収集手段として使われていけば、もっと効果的になるだろう。そして、人の行きづらい場所からの情報収集での安全性が確保される。調査結果②では、被災者は生活に必要な情報を欲していることがわかり、記者に求められているのは「迅速な」情報提供といえる。

【結論】記者が安全に被災者が得たい情報を得るためには、「1. 情報を得る」過程で、ドローンやヘリコプターを手段として迅速さと安全性を確保することが必要であるということがわかった。今後の課題として、他に被災者が欲しい情報をさらに調査する必要がある。また、記者が得た情報をいち早く被災者が得るには、どのように新聞を配付するかを探る必要がある。これらは10月末に調査をし、調査結果を本大会にて発表する。

【参考文献リスト】

- ・矢内真理子(2021)『署名記事からみる福島原発事故報道：毎日新聞を事例に』同志社大学社会学会 138号 p. 63-83
- ・『新聞週間特集：毎日新聞と東日本大震災 福島の記者たち、安全と取材で苦悩』2012/10/16 毎日新聞 朝刊・日本新聞博物館 企画展簡易資料集 ほか

新聞コラムを利用した学び

岩瀬日本大学高等学校

1. 研究テーマについて

新聞の一面には、朝日新聞の「天声人語」をはじめ、読売「編集手帳」や毎日「余録」、産経「産経抄」などコラムが掲載されている。新型コロナウイルス感染拡大による休校期間中に、現代社会の担当の時杉先生から「新聞のコラムを読んで見出しをつけてみよう」という課題が配信された。今までは新聞を読むことに苦手意識をもっていたが、新聞のコラムなら比較的文字数も少なく、読みやすそうな印象だったので、文章を読むのが苦手な自分にも実践できると考えた。

2. 仮説～どのような力が身に付くのか～

- (1) 文章を要約する力が身に着く
- (2) 語彙力が高まる
- (3) 文章の流れや、読者を引き込むための言葉遣いや表現と出会うことができる
- (4) 文章を読むことが苦でなくなる。
- (5) 集中力が高まる

3. 実践報告

(1) 「まなび場天声人語」

朝日新聞では、2021年7月から、毎月1回、お題となる天声人語を読んで、15字以内で見出しをつけて投稿する「まなび場天声人語」がスタートした。優秀作は毎月第4月曜日の朝刊で掲載し、図書カードが贈られるという。見出しと、その見出しを考えた理由(100～200字)の2点で選考されるそうだ。

先生からお題となるコラムと応募用のFormがGoogle Classroomで配信されるので、15字以内の見出しを付けてその理由を添えてFormを送った。

(2) 新聞コラムの「書き写しノート」

「まなび場天声人語」に応募するようになってから新聞のおもしろさや読みやすさを実感し、さらに新聞に触れることで、語彙力や要約力を高めたいと思った。

各新聞社からコラムの書き写しノートが販売されているそうだが、私は、朝日新聞の「天声人語書き写しノート」を使用した。文章の中で読者に伝えたいことやキーとなる文章にマーカーを引いたり、声に出しながら書いたりして、常に自分の意見や考えをもちながら読むよう心掛けた。

私は、先生から渡される天声人語とともにその内容に関連する新聞記事を照らし合わせながら読み、目につきやすくするために端的でわかりやすい言葉を選ぶ。文章の中で一番伝えたい内容を見出しに入れるようにした。

4. 「いばらき春秋」著者とのオンライン取材

新聞コラムに興味を持った私は、茨城新聞のコラム「いばらき春秋」を執筆する編集局長の渡辺勝さんにオンライン取材を行った。限られた字数でまとめるコツや、コラムを執筆する際に意識していること、また、通常の記事と異なり、コラムには執筆者の個性が表れ、渡辺さんも常に自分らしい言葉を探したり考えたりしているそうだ。読者の心を掴み、共感を呼び起こすのがコラムの価値なのだと知った。

5. 成果と課題

(1)の「文章を要約する力」や(2)の語彙力は今後も継続することでさらに向上させていきたい。

(3)については、普段は読まないような文章に触れることができるので、新たな発見があった。(4)については、コラムで読んだ内容が学校の授業に出てくることがあるので、興味を持って授業を受けることができている。また、コラムに書かれていた内容を授業で深く学んだり、クラスメイトと意見を共有したりするので、授業がとてもおもしろく感じるようになった。(5)については、読むだけではあまり印象に残らなくても、書くことで記憶に残りやすく、より自分のものになったと感じている。

今後の課題としては、知識の引き出しを充実させるためにも、日頃から継続的にコラムをスクラップするなど活用することで社会の関心事やその変化に気づくことができると思う。また、同じ出来事でも、別の新聞社のコラムを比較読みすることで、多面的な視点も養いたいと思う。